

後期高齢者4人秋の葛城山を歩く

2025年10月14日後期高齢者4人で葛城山を目指した。目的は秋の花の鑑賞。仲間の運転する自動車で葛城山ロープウェイ登山口駅に。

駐車場に車を置き、服装を整えて、8:40 ロープウェイ登山口駅前を出発。獣除けフェンスをくぐって登山道にとりつく。飛び石伝いに川を渡り。9:20 河原で休憩。ツリフネソウが風変わりな赤い花を吊り下げているほか、アキチョウジ、ツルニンジン、アケボノソウ、ヒヨドリバナ、ヤマルリソウなどが入り混じって咲き、アサギマダラが舞っていた。

花のない人工林下の登山道

ここから人工林(スギ、ヒノキ林)の中を登る。ここはいつも歩いても花の少ない場所だが、今日は花が全く見当たらない。花のないチゴユリが葉を茂らせて群れを成していただけ。

雑木林に秋の花々

7合目あたりから、道は人工林と雑木林の境目を縫って進むようになり、アキチョウジ、アキギリ、ジンジソウ、イヌショウマその他が姿を見せ、山頂部での花盛りを予感させて、足取りを軽くしてくれる。

↑イヌショウマ

ただ、毎秋ここで咲き誇るアキギリやアキチョウジが少ないのは、上部で続けられている土木工事の影響なのだろうか。

眼下に広がる大和平野と大和三山

センブリー

9合目で、登山道改修工事に携わっている人々に感謝の礼を言いつつ、手入れ中の急坂を登って11:30 ロープウェイ山頂駅と山頂草原とを結ぶ舗装道路に合流。

路面に散乱するシバグリ(ヤマグリ)の実をBさんが見つけ、みんなで拾い、アサギマダラをカメラで追いつつ、11:50 白樺食堂裏の展望デッキに到着。

眼下に大和盆地の南半分が広がり、そこに島のように大和三山が浮かんでいる。

ナギナタコウジュ↓



山頂草原での秋の七草づくし

休憩後、山頂草原への道をゆっくりと登る。ススキが広い草原を覆っているが、その穂はまだ褐色で硬い。そのススキの隙間、隙間にハギ、ワレモコウ、ツリガネニンジン、オミナエシなどがそれぞれ自己主張をするかの如く花を開いている。

頂上の一帯にハンギンググライダーの発進基地が設けられているが、ここは折々に手入れがされるのか背丈の低い草原になっており、そこにキキョウ、カワラナデシコ、フジバカマ、リンドウなど秋の七草が咲き競っている、また笹原との境目にはセンブリーがたくさんの群落を作っている。ここでもアサギマダラがヒヨドリバナで吸蜜していた。

国民宿舎の前にナギナタコウジュ

下山にかかることになり、国民宿舎の前を通ったが、同行のAさんがナギナタコウジュの群れを見つけた。この人の目ざとさにはしばしば驚かされるが、今日もつぼみをほどいたばかりの花を次つぎと見つけてくれた。



↓ツリフネソウ





山歩きを豊かにしてくれる同行者たち

自然研究路を歩くべく、ダイトレ(ダイヤモンドトレール=金剛・葛城山系の縦走路)に入るが、ここでBさんが草むらの中のシバグリの実を見↓カワラナデシコつけて、またまた、賑やかな栗の実ひろいが始まった。

Bさんは登りの登山路でも何年か前にフキノトウを探った場所を覚えていて私たちに教えてくれたのだ。

↑アサギマダラ もう一人のCさんは野鳥の鳴き声に詳しく、遠くからの声でもその種を教えてくれて嬉しい。



山を愛し、それぞれの特技・持ち味を活かして山歩きを楽しんでいる人々との山行は実に楽しく、山歩きを豊かにてくれる。

花がなかった自然研究路

同行の皆さんに感謝しつつ自然研究路に踏み込んだ。アキギリなどの花を期待したことだったが、花は全く咲いておらず、肩透かしを食ったような気持ちで14時台のロープウェイで山を下った。

来春のカタクリ、春の七草を楽しみにすることにしよう。

クサアジサイ→



←ハギ



続・続・二上山に咲く花々

54

キンモクセイ(金木犀)

モクセイ科モクセイ属

大阪側登山口・万葉の森からの舗装路が鹿谷寺(ろくたんじ)跡からの登山道と合する三差路に数本、岩屋峠その他に少数ずつ、黄金色の花を咲かせ、甘くて強い芳香をあたり一面に漂わせています。

植物名の由来は、樹皮が動物のサイ(犀)のそれに似るので中国で木犀と名付けられたとのこと。サイを見ることが多い私達には理解できない命名ですね。

中国原産の植物で、日本では自生しないので、植栽されたものでしょう。江戸時代に渡来して以来、庭木や街路樹、公園などに植えられているなじみ深い植物で、ジンチョウゲ、クチナシとあわせて“日本の三大香木”とされているほか、食品(花弁)、フラワーティー、木犀酒、薬、芳香剤など広く役立ってきました。

江戸中期に渡来したとされていますが、今では静岡県の木とされているのをはじめ、自治体の木としている市町村も名古屋市、米原市(滋賀)、橋本市(和歌山)、行橋市(福岡)、広陵町(奈良)など全国に多数あります。

花期は10月～11月。秋の季語。「木犀に故郷の道を愛すかな」(大谷句伝)など多くの詩歌に詠まれてきましたが、「秋」が無くなりつつある昨今、こうした情景もどうなるやら、心配ですね。

